

第3章 調査の成果

第1節 調査区割り

1号墳の中軸線(南北ライン)を設定し、3級基準点・4級基準点、1号墳及び周囲に便宜的にグリッド杭を設定した。東西軸は東方向に1・2・3・4とアラビア数字を付け、南北軸は南方向にA・B・C・D・Eと付けた。出土遺物については、基本的に墳丘測量図にドットを落とし、取り上げた。標高は東京湾平均海水面(T. P.)を基準とした。2号墳については、1号墳の中軸線と同じ方位を援用して中軸線を設定し、トレンチ調査を実施。古墳および周辺の地形をマップデジタル化及び墳丘測量を実施した。

第2節 1号墳(前方後円墳)

1号墳は、丘陵の北西端に位置し、西側と北側は急斜面な谷地形となっている。前方後円墳の調査を最初に実施。樹木を伐採し、見通しは良くなったが、墳形を正確に把握するための伐採、下草刈りに多くの労力がかかった。1号墳の後円部主体部は大きく盗掘を受けていることは、以前から確認できており、また後円部南西部など削平された状況もうかがえた。後円部の墳丘は高く、前方部の墳丘が低平な矢田高木森古墳と似た墳形を呈しており、前方部東には墓石があり、墳丘の一部が改変されていた。

墳丘表面の掃除を実施したところ、遺物の散布が見られた。特に後円部の墳頂部を中心に北・東・西の墳丘斜面に板石が散在し、埋葬施設との関連がうかがえたが、寸法も小さく、出土量も多くはない。土師器以外に、弥生土器・縄文土器も僅かに散見され、古墳以前の暮らしも推測できた。

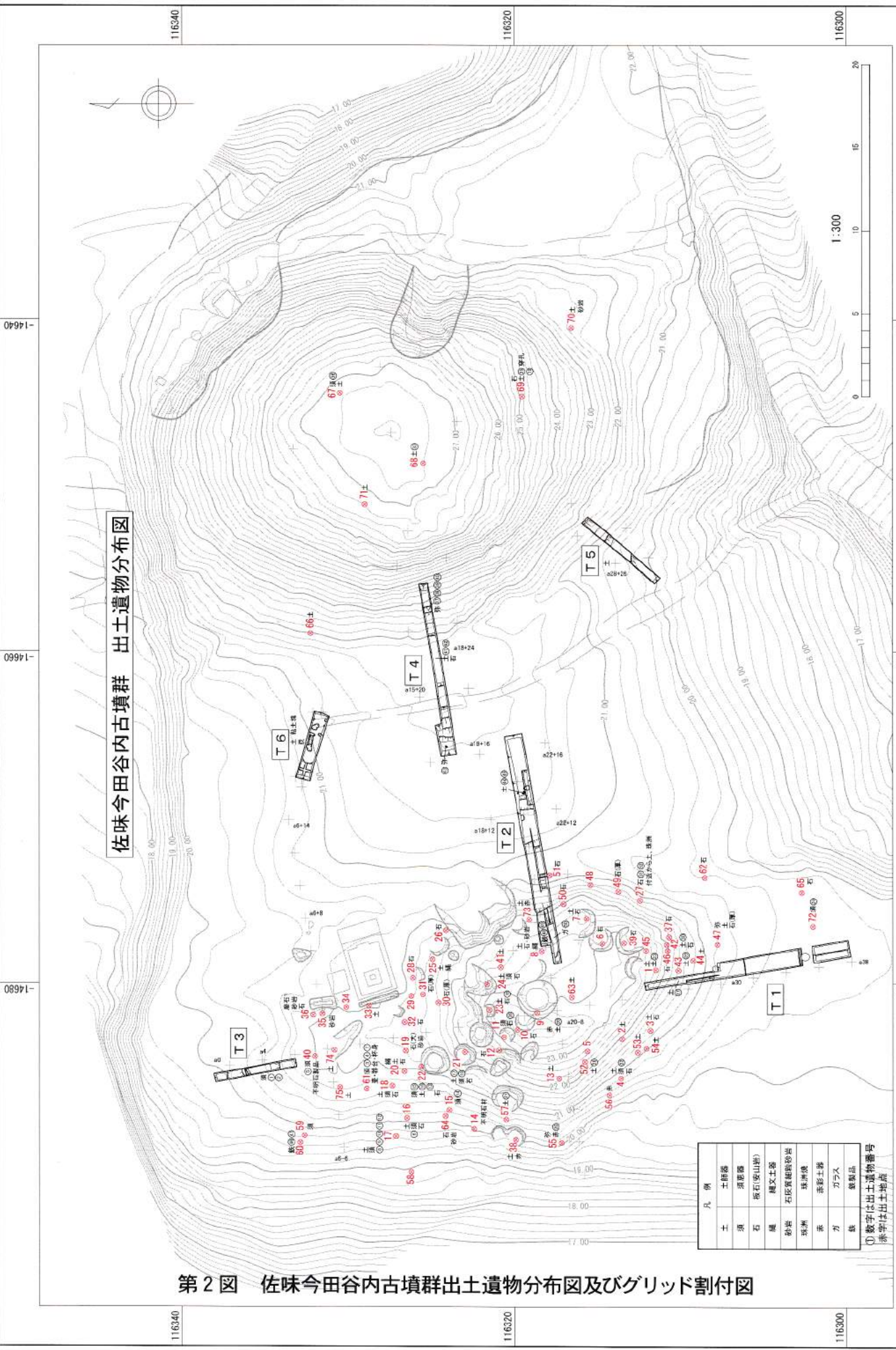
1号墳の墳丘上での遺物の出土状況は、被葬者を埋葬した際の葬送儀礼の痕跡を復元できる可能性も考えられたため、出土ポイントにピンホールを挿して、ナンバリングをして遺物を取り上げた。必ずしも、1点ずつナンバリングをしているのではなく、場合によっては周辺に散布する(半径約50cm以内)遺物をまとめて取り上げた。(平成25～26年度に実施。平成27年度については、草刈や清掃、自然条件で原位置から大きく移動していると推測される場合には、番号は付けていない。)

1号墳・2号墳を通して1から70番までの出土ポイントがあった。(第2図参照)ほとんどが1号墳での出土である。

1) 出土遺物の分布

墳頂部は盗掘により、東部分は削平を受けており、西側の方が墳丘は高い。現況から判断すれば、東側寄りに埋葬施設が存在した可能性が考えられた。墳頂中心部分に大杉があり、伐採後に根元周辺の攪乱を清掃して、西側の墳丘土層の確認を試みたものの、表面観察のみに留まった。かなり軟質の土層であったため、盗掘の際の廃土の可能性も考えられた。

後円部からは、安山岩質の板石が多く出土している。これは、三室まどがけ古墳群や矢田高木森古墳の石室の床石に使用されたものと同じの石材と推測され、能登島須曾蝦夷穴古墳近くの海岸部で採取され、同古墳にも使用された石材と思われる。ただし、大きいものでも20cm程度で小片の板石がほとんどである。墳丘の東側から南側にかけて15点ほどの板石が墳頂から墳裾にかけて出土している。また、後円部墳頂の北から前方部及び東西くびれ部付近で20点程の板石が出土しており、その分布状況から後円部に使用されていたことが類推され、盗掘の際に散在したような出土状況と想定できそうである。土師器片は多く出土しているが、ほとんどが細片で甕が多い。他に壺・鉢が



第2図 佐味今田谷内古墳群出土遺物分布図及びグリッド割付図

ある。また、赤彩の高杯片も後円部を中心に8点出土している。

土師器は後円部の中腹部で採集できた。後円部の全般的に散在しているが、北側から前方部、西側くびれ部にかけてやや集中して出土している。器種は甕・壺・鉢・高杯。

須恵器については、後円部全体で6点の須恵器甕片が出土しているが、墳頂部では1点(24)出土。須恵器が比較的まとまって発見された地点は、前方部の西側からくびれ部(15・16・17・18・22)と前方部北端(40・T1)で、前者では非常に密集して、しかも細片で出土している。器種は甕、壺(台付)、高杯、杯身、装飾器台また高杯(波状文)、いずれも細片のため復元は難しいが、この出土状況から考えられる姿は盗掘の結果ではなく、墳丘で行われた墓前(上)祭祀状況が復元できそうである。後円部と前方部が接する主軸より西側のくびれ部での出土は、祭儀後に人為的に破碎している状況がうかがえる。この状況と似た例が矢田高木森古墳でも見られる。高木森古墳の後円部に寄ったくびれ部の鞍部表土層中から多量の須恵器と少量の土師器が発見され、埋葬時(直後か)に行われた葬送儀礼の場だったと推定されており、これらの土器は葬送による供献用土器であり、祭儀終了後に人為的に破碎散布していることから、後期初頭の盟主的な前方後円墳における墓前祭祀の様相がうかがえる事例と報告されている。1号墳においては出土量は少量であるが、葬送に関わる供献用の土器である可能性は考えられる。

後者については、須恵器甕・波状文のある台付壺か、高杯または器台(透孔)が復元できる。前者と一連の供献用土器なのか、別の可能性も考えられる。

少量だが、海石(石灰質細粒砂岩)の散布がみられる。前方部北東部に見られたが、現在墓石があるように後世に墓地として利用されていた痕跡の可能性もあるが、海石は板石と同様に矢田高木森古墳や三室まどがけ古墳でも石室の構造材として使用されていることから、埋葬施設に使用されて石材としての可能性も考えておきたい。

2) トレンチ1(平成26年度調査)

後円部の墳形を確認するため、後円部の南側に設定。南北の中軸線に沿って、墳裾(周溝)に推される地点に幅1m、長さ5mのトレンチを設定し、さらに北側(墳丘側)に幅0.5m、長さ4.8mのトレンチと南側に長さ2m、幅1mのトレンチを設定した。トレンチ最高所の標高は22.3mで最も低い南端との比高差は2mである。

墳丘の表土を丁寧に検出しながら調査を進めた。表土を剥いで、②・⑥層を丁寧に精査しながら、掘り下げる。当初、墳裾には周溝の存在も想定していたが、検出できなかったため、さらに南にトレンチを拡張して調査したが、周溝及び区画溝は発見されなかった。杉根の攪乱もあったが、平面及び断面では明確に確認することは困難であった。そこで、墳丘の築造方法から墳裾を確認するために、墳丘側のトレンチを拡張した。北端では②層直下に旧表土と思われる③層が確認できた。その下からやや締まった④層(にぶい黄褐色粘質土)を検出。やや南側のa28グリッドラインから断ち割りを入れて、土層を確認した。④⑤⑦⑧層からは遺物も出土しておらず、きれいで締まっていることから、地山(基盤層)に近い所と想定し、直上に古墳以前の旧表土(③層)が存在している状況が考えられた。墳丘自体は外観からも削平されているため、トレンチからは、ほとんど遺物は出土しておらず、表土から土師器3点、赤彩高杯1点、砂岩片と赤彩高杯(27)が出土しているのみである。

3) トレンチ2(平成26・27年度調査)

後円部の墳形及び周溝を確認するために、当初は後円部の東側傾斜面に設定。後に東西に拡張した。長さ13m、幅1mを測り、西側に幅0.5m、長さ1mの拡張トレンチを設定。墳頂部で標高22.8mを測る。

墳丘東側は道の痕跡があり、前方部に所在する墓石の造成時の作業道や大田町藤平谷内に抜ける旧道として利用されたようで、墳丘も造成時に削られている状況は窺えた。また、1号墳の東側、2号墳に付随するように南北約18m、東西約13mの長方形の土壇状の高まりが存在した。2号墳の

墳丘の一部の可能性も含めて確認するためにトレンチを設定した。

平成26年度は、墳丘中腹から幅50cmで東側にトレンチを拡張しながら調査を実施した。墳丘は削平を受けるが、作業道の下は落ち込んでおり、周溝の窪みが道となった印象も受けた。落ち込みは、トレンチ西端から6.2mの地点で東側に緩やかに立ち上がり、さらに地山が東側に落ち込んでいく土層が確認できた。1号墳または2号墳に伴う周溝か、それとも古墳以前の遺構なのか判断が出来なかったため、次年度に調査を持ち越すこととし、一旦トレンチを埋め戻した。

平成27年度に引き続き調査を実施した。トレンチが狭小であったため、幅を1mに拡張し、溝の時期と性格を押さえるために調査を進めた。長方形の土壇は溝が埋没後、時間を経てから盛土造成した比較的新しい造作であることが、トレンチ4の調査からも判断できた。また、この落ち込みも2号墳の周溝の可能性が高いことも同様にわかった。周溝の底部は根などの攪乱の影響もあり、地山との境も不明瞭な部分もあったが、深さ60cmを測り、底はフラットである。最下層に⑩層（褐色粘質シルト）が44cm堆積しており、炭が混じる。土師質の細片5点、赤彩1点、安山岩の板石2点が出土している。また、西側落ち込み際に土師器の壺（44・45）一部がまとまって出土していた。直上に硬く締まった黒っぽい⑨層炭混じりが水平に堆積していた。土師器片6点出土。他に炭、小礫が出土。その上の⑥層も厚さ14cmで堆積する。③層は盛土。溝の埋土は底が平坦なためか水平に堆積している。⑩層は、30～50cmの厚さで意図的に埋めたような堆積状況であり、⑨層はその後に形成された旧表土と理解したい。⑥層は堆積した土層というより整地をしたものと思われる。

墳頂部

後円部墳頂は盗掘の痕跡があったが、埋葬施設が存在する可能性があったため、慎重に掘り進めた。まずは、墳丘の中腹から墳頂に向かって調査を進め、標高21.8mの高さで黒褐色の旧表土（⑤層）を検出（遺構の可能性もある）。断ち割りにより、⑤層の下は地山（⑦層：にぶい黄褐色土で固い）となっていることを確認。墳頂部ではトレンチが狭いので、平面で遺構を把握することは困難であったが、⑤層の上は地山質の③層を堅緻に造成していることが分かった。表土直下の②層は柔らかく、精査中に僅かな土師器片や剥片に混じって、鉄刀の茎（48）とガラス小玉（50）が出土した。古墳以外の遺物も出土しており、出土状況も単発であったため攪乱と判断した。その下の④層は③層を切り込んで堆積しているようにも見えるが締まっていない土であった。ここからは、鉄製品（49）が出土した。調査時点では分からなかったが、後に長頸鎌（4点）の一部が鏽着したものだと言明した。

4) トレンチ3

前方部の先端部を確認するために、北端に長さ5m、幅0.5mのトレンチを設定した。トレンチ南端の標高は20.9m、北端で20.1mと0.8mの比高差しかない。トレンチの南側にはケヤキがあり、調査前には伐採したが、根が周囲に蔓延りトレンチ内にも太い根が伸びており調査は難航した。前方部は低平で墳形も不明瞭であった。表土を除去し、②層を精査。②層は墳丘盛土が流出して堆積したものと思われる。③層は地山ベースで盛土もしくはその流出土と想定しているが、やや軟質である。表土からこの層までは竹の根が繁殖しており、土色の差異が少ないため土層の判断は難儀だが、トレンチ北端から南に1mの地点にやや落ち込んだ部分（断面図の破線部）が確認できる。これを墳丘を区画する（周）溝として想定し、前方部の先端と理解したい。この部分に墳丘の竹根が猛烈に繁殖しているのは、柔らかい埋土に竹根が入り込んでいるためだと思われる。なお、地形は緩やかに北側に傾斜し、北に3mの辺りから崖地形となる。

5) 墳丘の築造方法

トレンチ3箇所成果から類推できるのは、トレンチ1と2で確認された黒褐色の旧地表面でこれより下は地山であると考えられる。この丘陵尾根は標高20mラインで平坦に整えられ、1・2・3号墳を築造している意図が窺える。古墳の設計図を元に縄張りをして、丘陵を削り出し、おおまかな墳形を作り出してから墳丘の上部を盛土成形したと推測される。ただし、墳丘の上部は攪乱や削

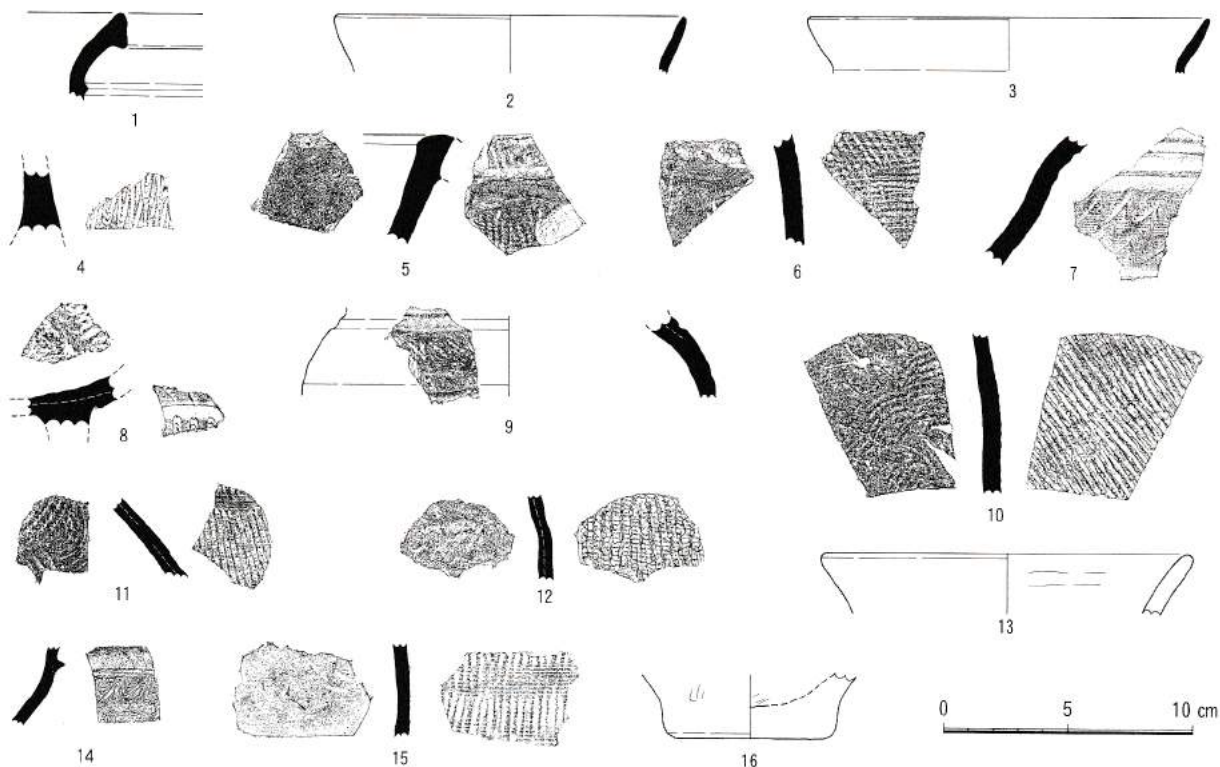
平のため、築造時に墳丘の中心部から土を被せていったのか、土手を築き土を充填していったか等、どのような盛土工法を採ったかは分からないが、墳丘上の表土も滑りやすく、トレンチ1の盛土も軟質であったので、後円部の南西部が崩れているのは、被せた盛土が軟弱で流出した結果なのかもしれない。後円部にあったと思われる埋葬施設の形態や構築方法も不明であるが、墳丘に散在する安山岩の板石や砂岩を用いた石室が推測される。

前方部については、地山成形をして盛土していると思われるが、盛土が流出している状況が確認できた。地山削り出しの段階で後円部が高く造られており、盛土の前後関係は不明だが、後円部を重要視して築造していると思われる。

6) 墳丘の復元

保存目的の最小限の調査範囲での確認調査だが、凡その規模・墳形を把握することができた。後円部、前方部とも削平や長年の風雨により墳形が変わっており、発掘成果から当時の築造規格まで類推する情報は極めて少ないが、敢えて復元するなら、南側は後円部トレンチ1の地山傾斜変化点、北側は前方部との接点、西側の谷地形では標高20mラインで東側は削平を受けているが、トレンチ2の溝状の落ち込みが辛うじて周溝の痕跡だと推定すれば、後円部径（推定）18.4m、後円部高（推定）2.4m、前方部長（推定）10.6m、前方部幅（推定）10m、前方部高（推定）0.4mが推定できる。前方部の先端は隅がやや広がる形状が復元できる。後円部の高さは東側墳裾からの数字である。西側の標高19.4mラインにテラス状の平坦面から観測すると後円部高（推定）4mとなる。

1号墳は、この丘陵の北西端に位置し、北・西側の麓からは谷地形を利用して、墳丘をより高く見せるような築造をしている。



第3図 1号墳前方部くびれ部出土遺物実測図 (S=1/3)

7) 遺物

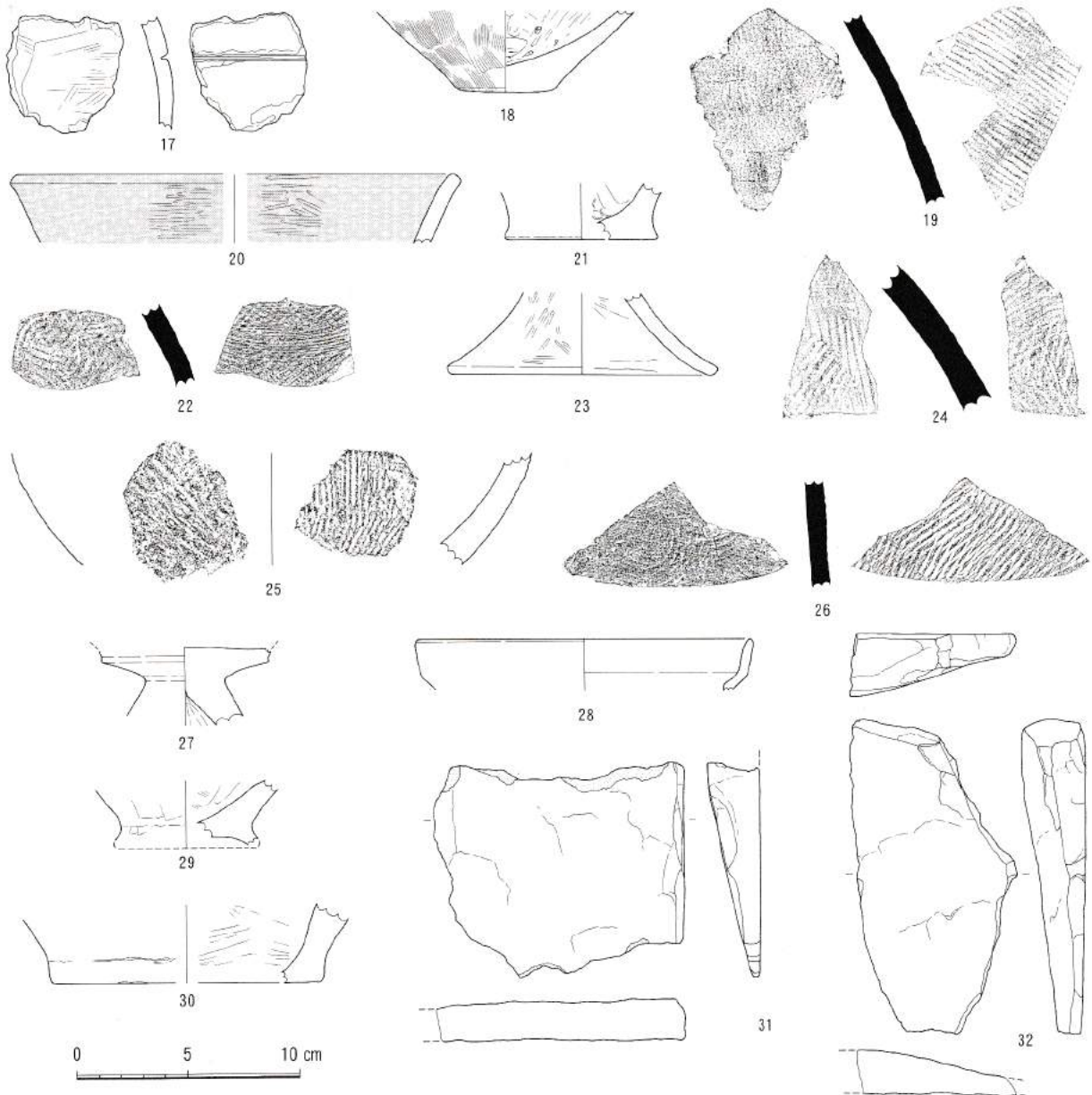
出土遺物は、表2遺物観察表を参照してもらい、ここでは特殊遺物についてのみ記述する。

48は鉄刀の茎で茎尻側は目釘孔部分で欠損、表裏面及び刀側に把木の木質が残存しており、柄装具への刀身の装着は背からの落とし込みによるものと判断できる。目釘孔は表裏両側から穿孔された可能性が高く孔内中央付近が狭くなっている。目釘は穿孔方向と並行する木目の木製目釘。柄の背側には、幅2mm程度の紐状の巻きつけが残存、素材は不明。分析では有機質を想定（Ag等検出されず）。

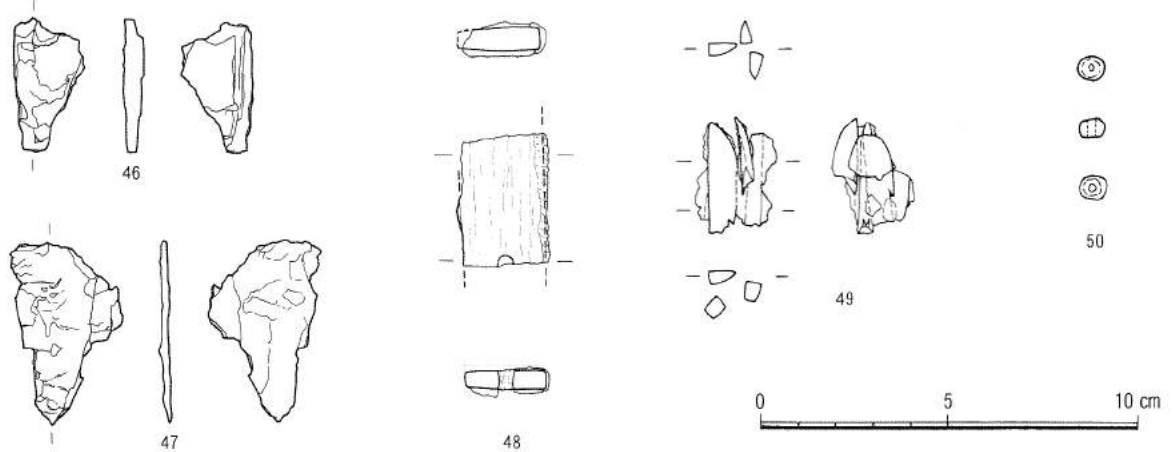
49は、長頸片刃箭式の鉄鏃で錆着により、判断が難しかったが、4点の固体が確認できた。残存長2.9cmを測る刃も残る。

50は、胴側面最大長7.5mm、小口最大径5.49mm、孔径2.22mm、重量0.3678gを測るガラス玉で基礎ガラス材質は「ソーダ石灰ガラス」でCo(コバルト)によるイオン着色がされている。

孔と平行方向に走る気泡列などから熔かしたガラス塊を管状に引き伸ばす「引き伸ばし管切技法」による製作である。



第4図 1号墳後円部出土遺物実測図 (S=1/3)



第5図 1号墳鉄製品・ガラス玉実測図 (S=1/2)

第3節 2号墳 (円墳)

丘陵の東端に築造されており、古墳群中最も墳丘が高い円墳である。現状は北東部が墓地として利用され幅10mほど墳裾が削平されている。その墓石の隣には五輪塔の残欠(砂岩)も残っている。南東部分も土取りのためか幅3.5m、長さ5m程度墳丘が削られていた。また、現況は南北に長い楕円状であるが、東西斜面が急傾斜であるため、改変されている可能性が考えられた。墳頂は残存長径9.2m、短径8.4mを測り、付近には盗掘坑も見当たらないことから、埋葬施設は遺存していると思われた。西側に存在する方形の土壇状の高まりも当初は造り出し等の可能性も考えた。

1号墳の調査でおよその規模・墳形・時期を把握することができたが、2号墳との前後関係が不明であったため、2号墳の正確な墳丘測量実測を行い、墳形をしっかりと把握し、合わせてトレンチ2で確認された落ち込みが周溝になるのかを確認するためにトレンチ4・5・6を設定した。

1) 出土遺物

1号墳と比較しても、2号墳から採集できた遺物は圧倒的に少ない。盗掘を受けていないことも一因でもあろうが、墳丘上で執行される葬送儀礼などの違いがあるのかもしれない。残存長径9.2m、短径8.4mの墳頂から採集できた遺物は10点も満たない。須恵器の甕(36)、土師器甕口縁部(33)、他土師器細片のみである。出土地点69からは、土師器の底部穿孔土器(35)や土師器高坏(34)、板石が出土している。

2) トレンチ4

2号墳の西側墳裾の確認とトレンチ2で発見された遺構の確認のために、墳丘から西側に幅0.5m、長さ8.5mを設定。落ち込みが検出されたため、西側に2m、幅1mのトレンチを拡張した。墳丘のある東側は竹の根が繁殖し、掘り下げるのもかなり難儀した。墳丘側の上層(㉔層より上)はほとんど竹根の影響を受けていたが、特に㉕層の竹根はひどく入り込んでいた。黒褐色の旧表土(㉔層)が標高22.5mラインで検出された。細片であるが弥生後期に比定される甕口縁部(37・38・39)が出土している。長さは1.3mのみ確認。1号墳の旧表土より0.6m程高く、古墳築造以前の様相は2号墳から1号のある西側に傾斜していく地形であったと推測される。墳丘は削平されて